

福岡大学医学会ニュース

故田川隆輔教授を偲んで

医学部長 三好 萬佐行

口惜しくも、私共が敬愛する田川隆輔先生を偲んで追悼の辞を書く羽目になり、残念でなりません。

去年の十月二十九日の夕方、向い合った部屋の前で「お互い明日も授業や実習が重なっていることだし、まずは身体を大切にしましょう」と、先生と言葉を交したのが永遠の別れとなりました。それから三時間後、急な呼び出しに駆けつけた時には、もう先生は無言でした。「田川先生、それは無いよ」と恨みの言葉を申し上げた思いでした。

田川先生と私が出会いまして、先生と言葉を交したのが永遠の別れとなりました。それから三時間後、急な呼び出しに駆けつけた時には、もう先生は無言でした。「田川先生、それは無いよ」と恨みの言葉を申し上げた思いでした。

田川さんと歩いた 四十五年間

元福岡大学教授・九州大学名誉教授 和佐野 武雄

私が田川隆輔さんと始めて出会ったのは昭和二十一年の春から四十五年も前のことである。九大付属医専の教授だった私が戦地から復員して再び教壇に立つとそこに彼がいたのである。創設当初、専門部の学生定員は五十名であったが、終戦後台湾や朝鮮からの引揚学生や戦後廃校となった国内の医専などからの転入生で田川さんのクラスは一六六名にもなっていた。全部の学生の顔や名前は覚えきれなかったが、田川さんは時折私の部屋に遊びに来ていた。当時の彼の姿をよく覚えていい。背が高く、人なつっこい好青年であった。私は昭和二十四年夏から徳島大学医学

い兄上さまのお気持ちで広く、暖かく接してくださいました。先生はそんな優しいお人柄を学生の指導の上にも如実に発揮しておられました。秀才組というよりは幾度となく落第を重ねたり、いろいろな事情から勉強が遅れた学生達により深い愛情を注がれていました。そのような学生を相手に何年もの間、土曜日毎に教室を開放して勉強会をやってもらったのを身近に拝見し、頭の下がる思いでした。

九大、福岡女子大、福大と歩んでこられた中で、先生の御研究には三つの大きな流れがあったように拝見します。

先に述べました神経細胞核の核膜の問題は別として、第一は末梢神経の線維構築の問題で、和佐野先生の畢生のお仕事を分担されました。第二は女子大へ移られてからのこと。肥満と栄養についてい

私共医学部の教職員で協力して、完成を目指して頂く所存です。

数年前の大病を克服され、健康増進のために始められたゴルフは先生ならではの味わい方でした。北は北海道大学名誉教授であられた、今は亡き兄上様が待ってられる北海道から、南は日本を越えて友人の多い台湾まで、遍く多くのコースを楽しんでおられました。常々先生の広い御交友には感嘆していました。私共二人の或る日の会話の中で素知らぬ顔して、「三好さん、徐阿玉というのを知ってるね。ちょっと知合いでゴルフの手解きをしてもらってね」と、ゴルフと関わりのない人々にもテレビや新聞のスポーツ欄などで広く知られている有名プレイヤーの名前が交友の一人として出たのは驚いては驚いて、開いた口が塞がらなかった。お父上と中国の父・孫文先生のつながりから広がったと伺っております。

台湾の方々の交友は拝見して心暖まる光景でした。そのような外国の方々も、今は亡き田川先生とのおそれの思い出を偲んでおられることでありましょう。

先生には奥様と三人のお嬢様が残りませんが、最大のお心残りとお嬢様方は嫁いでおられ、お孫様方もあって同じ穴の貉になつてしまつた。

先生の御命は新しい世代へと受け継がれております。この点では安心でした。

田川先生との長い交友は、先生が亡くなられても、私の心の中で続いています。片想いの交友ですが、暇を閉じて先生とお話することもあります。

ご冥福を祈っております。
(解剖学教室葬追悼文)



故田川隆輔教授

私の教室に帰って来てもらつた。それから間もなく昭和四十八年三月、私は九大を定年退職となり、田川さんと一緒に新設の福岡大学医学部に教授として着任、福大で新しく教育と研究を続けることになった。

田川さんは明るくてさっぱりした性格で、学生の教育には特に熱心であったし、個人的な世話まで行き届いていた。何かの悩みで大学に出て来なくなった学生がいたら田川さんはその存在を探し求めて大学に連れ戻して来る。そんな訳で田川さんは多くの学生から慕

われ教室はもとより自宅にまで度々押し掛けていたと聞いている。

田川さんとは教育や研究で苦勞を共にして来たが楽しい思い出も多い。九大時代、私の教室に台湾の大学出身の研究生が来ており、その父親が台湾医学会のリーダーの一人であったことから、ある年の暮、台湾医学会総会に招かれたが、その時田川さんは福岡女子大から台北大学医学部に留学中で約一週間彼と一緒に各地の楽しい旅行をする。ところがまたメキシコ市での国際解剖学会の折には、近くのテオチワカンやユカタ

半島の遺蹟・アカプルコなどを巡って飲を共にした。国内の学会にはいつも一緒に出かけたし、度々の教室旅行の楽しい思い出も数多い。

田川さんは大変な台湾ファンで度々彼を訪れていて台湾語も一応話せる様であった。従って彼の名士との交友も多く、福大を始め他の大学に台湾からの留学生受け入れにも尽力していた。田川さんは酒は飲めなかったが一角の美食家であつた。東区貝塚の料理に案内してくれた。彼はまた陶磁器に造詣が深く、日本古窯を始め各地の窯元巡りに同行しつづける間に私も

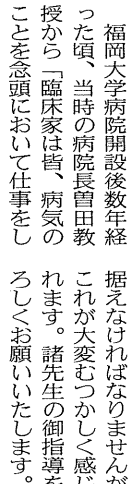
平成二年十月二十九日午後七時頃である。田川教室の大学院生から緊急電話で田川さんが突然危篤状態になったとの知らせがあった。東区貝塚の近所の道路上で、彼の友人の息の北川君運転、令嬢も同乗の車内でアツという間に昏睡状態に陥り、近くの貝塚病院に担ぎこまれたという。正に

福岡大学医学会 例会の報告
第24回例会
日時 平成三年一月三十日(水)
午後三時～四時
場所 福岡大学医学部臨床大講堂

1、座長 荒川規矩男 教授
「腎センターの臨床と研究」
腎センター 内藤 説也 教授

2、座長 高岸 直人 教授
「運動療法について」
リハビリテーション部 岩崎 敬雄 助教授

平成二年十一月以降に昇格又は就任

鈴木
九五

公衆衛生學助教授

稻益 建夫



うになり、健康に関する研究会にも参加するようになった。少しは健康のことを念頭に

昭和四十一年に九大薬学部を卒業し、民間の製薬会社に

健康要因の探索に重点を置き、高齢化社会に向けての予防医学的研究をしていきたい

福岡大学微生物学

微生物学講座は福岡大学医学部の設置（一九七二年）に二年遅れて一九七四年四月に開設された。当教室の特徴は、開設から一九八九年（平成元年）までのわずかに十五年内に主任教授が三人交代したことである。

山教授は電子顕微鏡を用いた食細胞機能の解析と、それぞれの研究テーマに全く継続性がなかった。このことは、研究・教育面でたえずリフレッシュしてきたという長所の反面、教室の歴史に一貫した方向がつけられなかったという大きな欠

初代天児教授（現九州大学医学部細菌学教授）は電子顕微鏡による病原微生物の研究、二代岡田教授（現名古屋市立大学医学部分子医学研究所教授）は補体を中心とした免疫学、三代永

陥が生れた。

この一年の間に、研究の大きな手段となる電子顕微鏡周辺機器の拡充として、急速凍結装置が整備され、また本年度は、感染生物学総研の電子顕微鏡が全面的

放射線医学助教授

神宮
賢



ものになってまいりました。その後、放射線治療不毛の地と言われて来た九州を、引っ張りつけておられる小野庸教授のもとで、仕事をさせていただきましたことになりました。どうぞよろしくお願いします。

大分県出身で昭和五十三年鹿兒島大学を卒業し、そのまま福岡大学第一内科へ入局しました。二年間の臨床研修を終えた後に浜の町病院内科、福岡市医師会成人病センターなどで約三年間の部外修練を

產科婦人科學助教授

瓦林達比古



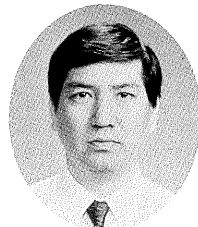
大分県出身で昭和五十三年鹿児島大学を卒業し、そのまま福岡大学第一内科へ入局しました。二年間の臨床研修を終えた後に浜の町病院内科、福岡市医師会成人病センターなどで約三年間の部外修練をしました。浜の町病院と成人病センターでは研修医時代の数倍のバラエティーに富んだ症例を短期間に経験することができました。大学病院とはまた違った臨床研修ができたのはい経験であったと思います。

昭和五十五年四月より、九州大学微生物学教室に入門させて頂き、ウィルス学森良一教授の下でウィルス感染と免疫、自己免疫疾患の発症メカニズム等について勉強しておりました。同時に、元講師の藤田兎一先生がクロン病患者の末梢血を使って実験に利用されており、お手伝いをするうちに私の主な研究テーマとなっていました。幸運にも昭和六十年四月より「古巣」の第一内科の仲間に加えて頂くことが出来ました。

学的検査（BPS）、ペースメーカーなどを主に従事しております。特に後者については病棟、外来の看護婦さんと協力し本年九月に第一回ペースメーカー患者会（仮名）を計画中です。研究面では高周波を用いたカテーテル・アブレーションによる不整脈の治療を実験動物を用いて研究中です。更に、体育学部との共同研究でスポーツ心臓の研究も行っております。臨床心臓電気生理学は新しい学問で、この約十年間で大きく進歩し

事を大学に在る間につ残す
たらと考えております。
会員の皆様、今後ともよろ
しくお願いいたします。

外科第一講師
原田 敏郎



一九七九年福岡大学を卒

た。大学院では、主に網膜・硝子体疾患に関する研究を行ってきた。具体的には、硝子体代用物質の生体適合性に関する実験、増殖性硝子体網膜症の発症機序に関する実験などを行ってきた。その間、昭和六十二年には大島教授の推薦を頂き、米国ジョンズ・ホプキンス大学ウィルマー眼研究所 Dr. Glaser のもとに、網膜血管新生および増殖性網膜症に関する免疫組織化学の研究をしてきた。平成元年三月大学院を修

昭和五十九年に大学医局に戻ってからは、消化器疾患の中でも肝臓病を中心に勉強しています。最近では、肝臓疾患の中でも肝硬変症の病態生理、肝臓癌の治療に興味を持っています。CTや超音波検査などのMEの進歩で最近の

これからは、実験で終わることなく、治療につながる仕事をしたいと考えております。どうか、よろしくお願い申し上げます。

内科第二講師
諸江 一男

ました。それは不整脈の学会で多くの若い研究者がすばらしい研究を発表していることからもうかがえます。今後は他施設の先生と交流を計りつつ、我が福岡大学独自の心臓電気生理の研究を進展させた

業、四年間の臨床修練の後、病態機能系大学院にてコレシストキニンのオッディ筋に対する作用機序に関する研究を行ない学位をいただきました。第一外科復帰後は志村前教授の御指示により肝臓外科を勉強することとなり、放射

了したのち、福岡大学病院眼科で一年、福岡赤十字病院眼科で一年の臨床研鑽ののち、今年四月福岡大学に戻ってきました。

現在は、外来・病棟における診療と手術を行いつつ、大学院時代からの眼内細胞増殖

肝臓癌の臨床にめざましい進歩

和の石



諸岡達也



の組合せが最も適しているのかはよくわかっていません。これからはできれば肝臓癌の治療方法の組合せについて勉強していきたいと思っています。今後とも宜しくお願い致します。

昭和五十五年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修後、循環器グループに入り、一年間の学外研修を含め四年間、医員として循環器臨床の修練を積んだ後、荒川教授、広木助教の後、

昭和五十四年福岡大学を卒業し、同年福大小児科に入局しました。二年間の臨床研修の後、大学院に進みました。

ついでいます。

卒後十三年目に入ると同時入局の者は誰もなく、周開を見渡してよくも赤鬼青鬼の中であつて来たものだと思ひながら、自分自身は赤かな青かなと考えてしまつこの頃で

肥満体となつてしまひました。一時はアスレチッククラブにも通つていましたが、最近はやほりがちでそろそろ本気で自己管理をしなければいけないと思つてゐる今日この頃です。

岡部 信郎



私は、昭和五十三年に久留

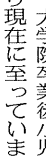


のもことで臨牀心臓電気生理学および犬心筋梗塞モデルを用いた心室頻拍の研究を行ってきました。約二年間の留学生生活で心臓電気生理学の発展の日本の格差、更に自分レベルの低さを改めて痛感しました。

大と九大で二年間ずつ勉強することになりました。臨床医学と基礎医学、福大と九大という対照的な両者を経験でき幸運であったと思います。

大学院卒業後小児科にもどり現在に至っています。平成

眼科講師
加藤 整



昭和五十三年福岡大学を二

内科第一講師

司城
博志



した。昭和五十三年六月より一年間は、研修医として福岡大学の一回生の先生方と一緒に、第一内科に勤務させて頂きましたので、院内に多く顔見知りの方がおられ、安心して働かせて頂いております。

性不整脈に対する植え込み除細動器の応用などの最先端の不整脈治療に携わることが出来たことはたいへん良い経験になりました。帰国後は、不整脈の臨床研究に従事しております。臨床では電気生理

た。海外から日本を、そして福大を見る貴重な機会に恵まれました。

臨床医としての抱負は、もともと広く深く小児を診れるようになることです。研究に関しては、自分が納得できる仕事

昭和五十七年福岡大学卒業、そのまま福岡大学眼科教室に入局。二年間の研修医と1年間の医員を経験したのち、昭和六十年福岡大学大学院医学研究科に入学しまし

ろ悩みました。父親の影響が
大きく結局耳鼻科へお世話
になることになりました。研
修後大学院へ進みまして、曾
田教授より聴性誘発脳幹反応
に関するテーマを頂き、「正
(三頁へ続く)

(三頁へ続く)

教室 便り

学位取得

管構築および自律神経支配に関する研究

菅 修三 (生理学第1)

論文名「ラット門脈における自発収縮力と収縮頻度の調節機構について」

池田 正一 (生理学第1)

論文名「Epitope mapping of the carcino-embryonic antigen with various related recombinant proteins expressed in Chinese hamster ovary cells and 25 distinct monoclonal antibodies」

徳永 武男 (薬理学)

論文名「Implication of postfunctional ATP release from guinea-pig atrium evoked by isoproterenol, forskolin and ouabain」

安藤 公英 (病理学第1)

論文名「Involucrin in well-differentiated adenocarcinoma of the lung: Comparison with adenocarcinomas of different origins」

増田 雄一 (病理学第1)

論文名「中潜時性感覚誘発電位の再現性について」

梅野 英輔 (小児科学)

論文名「Inhibition of neutral endopeptidase potentiates neurogenic inflammation in the rat trachea」

加藤 寿彦 (耳鼻咽喉科学)

論文名「二オキメチルヒスチン誘発によるヒトの大脳皮質反応の基礎的・臨床的研究」

天野 司 (解剖学第1)

論文名「スナネズミ肝門脈系の自律及びペプチド神経支配」

小川 孝二 (解剖学第1)

論文名「驚愕目脳血管の血

論文名「Genetic polymorphism of alpha-2-HS-glycoprotein type in the Kyushu district: A description of seven new variants」

菅原 恵二 (内科学第1)

論文名「超音波 Doppler 法を用いた肝細胞癌の血行動態に関する研究——肝腫瘍性病変の鑑別——」

松崎 元徳 (内科学第1)

論文名「Antihypertensive effect differs by exercise intensity in physical training」

田田 一法 (精神医学)

論文名「精神分業病新例における薬物種類反応性の研究」

田田 洋子 (精神医学)

論文名「精神分業病患者を対象とした生活技能訓練 (Social skills training) の研究」

田田 伸興 (精神医学)

論文名「神経症の病態・精神分業病の求行動過程」

論文名「外來通院精神分業病患者の再発防止に関する研究」

矢崎 直人 (精神医学)

論文名「精神分業病における退行現象とその治療的意義」

荒木 速雄 (小児科学)

論文名「気管支喘息児におけるメタボリック症候群の効果——EIB (exercise induced bronchospasm) と気道過敏性の改善について——」

片岡 厚生 (外科学第1)

論文名「肝細胞癌に対する術前肝動脈塞栓術併用肝切除術の検討」

多胡 卓治 (外科学第1)

論文名「胃食道逆流症の診断に対する超音波内視鏡の有効性——内視鏡・腹部血管造影および腹部 CT 所見との対比を含めて——」

虎石 顕一 (外科学第1)

論文名「無機成分から見たコレストロール系胆石の分類

論文名「RA 患者の末梢血リンパ球 T 細胞に認められる DAF の減少について」

白井善太郎 (外科学第1)

論文名「食道胃静脈瘤の内視鏡的分類に基づく血行動態と治療成績に関する臨床的検討」

山崎 宏一 (外科学第1)

論文名「HTLV-1 抗原吸着自己細胞に対する細胞性応答の解析」

岩崎 憲昭 (外科学第1)

論文名「Sequential appearance of host-derived T cell subsets during differentiation in nude mice grafted with rat fetal thymus」

魚返 英寛 (外科学第1)

論文名「胃癌症例における腹腔内遊離癌細胞の細胞核 DNA 量からみた腹膜播種の要因に関する研究」

三尾 寿樹 (外科学第1)

論文名「食道組織におけるサイトケチンの染色性に関する免疫組織化学的研究」

論文名「モノクローナル抗体を用いた消化管の癌腫、腺腫、およびその周囲組織膜における CEA の免疫組織学的検討」

奥 研二 (外科学第1)

論文名「モノクローナル抗体を用いた消化管の癌腫、腺腫、およびその周囲組織膜における CEA の免疫組織学的検討」

三島 公彦 (歯科口腔外科)

論文名「咀嚼能力の実験的ならびに臨床的研究」

石橋 正義 (内科学第1)

論文名「九州大学に提出。平成三年一月二十四日付で医学博士授与」

論文名「エンドトキシン肺障害時血管透過性の定量的評価について」

野中 隆 (眼科学)

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

研究業績「運動降圧療法」

論文名「運動降圧療法」